

波戸場

石火天臺

木船

沙撈越

白の船

皇太子御船

日蘭関係史を よみとく

下巻 運ばれる情報と物

フレデリック・
クレインス 編

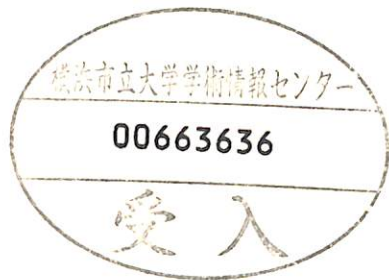
臨川書店

215
387
2

日蘭関係史を よみとく

下巻 運ばれる情報と物

フレデリック・クレインス 編



臨川書店

カバー図版
〔表〕 オランダ船からの砂糖の荷下ろし 『長崎阿蘭陀船出島絵巻』 蜜船卸貨図
立正大学情報メディアセンター 田中啓爾文庫
〔裏〕 銅の計量に立ち会う通詞とオランダ人 『長崎阿蘭陀船出島絵巻』 量官銅図
立正大学情報メディアセンター 田中啓爾文庫

目次

序……………フレデリック・クレインス 7

第1部 伝来する情報

〈医書／医術〉

第一章 オランダ商館長日記にみる西洋医術伝授……………フレデリック・クレインス 19

はじめに オランダ商館外科医による日本での初期の医療行為 秘薬への関心 オランダ商館外科医の医療活動 井上政重の屋敷における西洋医学の勉強会 日本の漢方

医による西洋医学の修得 嵐山甫庵の伝習記録 製薬伝習 テン・レイネ事件 吉宗による西洋医学受容の復興 梅毒治療と蘭学勃興 結び

〈本草書／植物図〉

第二章 江戸期日本における科学知識伝達の視覚化としての植物図……………ウラン・レメリンク (クレインス桂子訳) 55

はじめに 図版による情報伝達への移行期 芸術的な精度の進展 「模写」と画工 日本における「植物学」と視覚情報の異文化間交流 東から西へ、日本の植物の記録

結び

第三章 蒸気船の発達と日蘭関係……………西澤美穂子 81

〈帆船／蒸気船〉

はじめに

第一節 蒸気船の発達〔蒸気船のシステム 蒸気船の誕生と技術革新〕

第二節 蒸気船来航以前の影響〔アヘン戦争以前 アヘン戦争以降〕

第三節 蒸気船来航以降

おわりに

第2部 流通する物

〈和紙／小袖／和食〉

第四章 江戸時代にアジアとヨーロッパへ輸出された日本製品……………シンティア・フィアレ (クレインス桂子訳) 111

はじめに

第一節 和紙

第二節 ヤポンス・ロック(小袖)

第三節 飲食物〔和食の賞味は体得するものである 日本茶 酒 梅奈良漬、香の物、味噌、梅干し 醤油〕

結び

(表) オランダ船からの砂糖の荷下ろし 『長崎阿蘭陀船出島絵巻』 蜜船卸貨図
立正大学情報メディアセンター田中啓爾文庫

(裏) 銅の計量に立ち会う通詞とオランダ人 『長崎阿蘭陀船出島絵巻』 量官銅図
立正大学情報メディアセンター田中啓爾文庫

第五章 江戸期日本の消費生活形成における日蘭貿易の重要性……………マールサ・チャイクリン
はじめに……………(クレインス桂子訳) 147

- 第一節 輸入代替
- 第二節 技術移転
- 第三節 原材料〔ベツ甲 アカエイの皮 象牙〕
- 結び

第六章 インドの村から長崎へ……………和田郁子 173
——綿布から見る近世日本と世界のつながり——

- はじめに〔世界史のなかのインド産綿布と日本市場 オランダ船搭載のインド産綿布〕
- 第一節 近世インドにおける海外輸出向け綿布の産地〔輸出向け綿布の産地と多様な銘柄 綿布の生産と商人の活動〕
- 第二節 オランダ東インド会社のインド商館—繊維製品の取引を中心に—〔グジャラート ベンガル コロマンデル海岸〕
- 第三節 コロマンデル海岸の奥嶋、金巾、更紗—インドの村からオランダ商館へ—〔海外輸出用綿布生産の仕組み オランダ東インド会社による綿布調達の仕事 オランダ東インド会社による仲買商人の組織化と綿布生産工程への関与 日本市場向けに注文された綿布〕
- おわりに

第七章 日蘭貿易における染織輸入……………石田千尋 205
はじめに

- 第一節 十七世紀—十八世紀末におけるオランダ船の染織輸入〔毛織物 絹織物 綿織物 オランダ船輸入品における染織品の位置〕
- 第二節 十八世紀末—十九世紀中葉におけるオランダ船の染織輸入〔毛織物 絹織物 綿織物 オランダ船輸入染織品の数量変動と国際情勢〕
- おわりに

第八章 出島オランダ商館の輸入砂糖……………八百啓介 233
はじめに

- 第一節 十七—十九世紀の世界史における砂糖と長崎
- 第二節 出島オランダ商館の貿易と砂糖〔十七世紀前半のオランダ船と砂糖 出島オランダ商館時代の砂糖の輸入〕
- 第三節 国内における輸入砂糖の値段と流通
- おわりに

あとがき
執筆者紹介

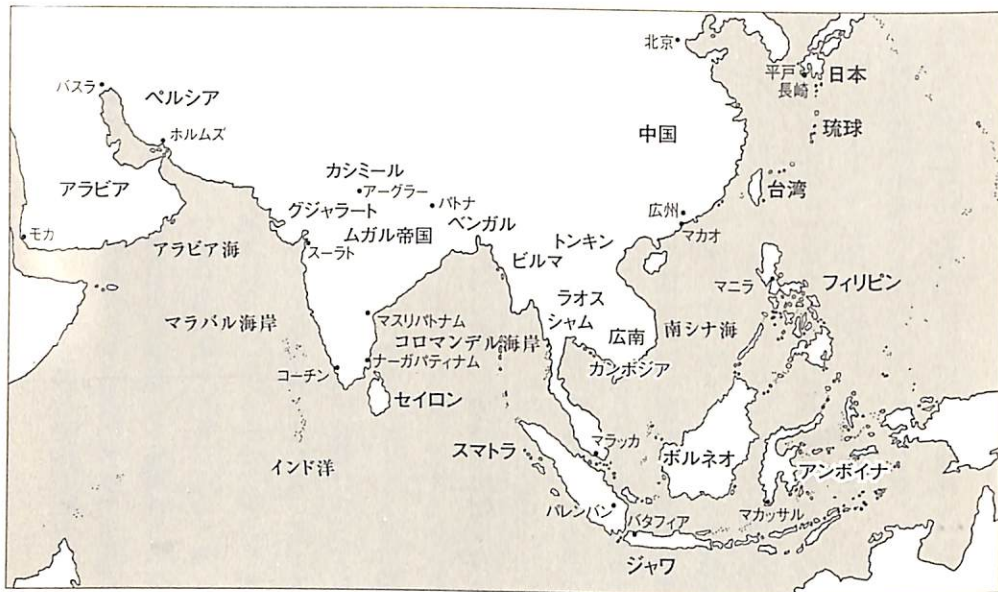
序

フレデリック・クレインス

『日蘭関係史をよみとく』上巻「つなぐ人々」では、江戸時代における国際環境や外交、そして日本とオランダをつないだ様々な人々の営みに焦点をあてた。本書下巻「運ばれる情報と物」では、江戸時代において、オランダ人によって伝達された西洋科学技術に関わる情報とオランダ船によって輸出入された物という二つのテーマを扱うが、各テーマの詳しい内容を紹介する前に、まずは日蘭貿易について概観しておきたい。

江戸時代を通じて、オランダ船が日本へ到着するのは例年夏頃であった。日本へ向かうオランダ船は、だいたい五月の終わりから七月半ばまでに、東インド会社のアジアにおける本部（十九世紀からは日蘭貿易を引き継いだオランダ領東インド総督府）があったバタヴィア（現在のジャカルタ）を出港していた。バタヴィアから日本への航海には、三月から十月に吹く南西の季節風を利用して、四週間から五週間かかった。船が日本に到着すると、オランダ商館にとって最も忙しい時期が到来する。短期間ですべての貿易業務を完了させると、オランダ船は秋に吹き始める北の季節風を利用して、バタヴィアへ戻っていった。日本におけるオランダ商館は一六〇九年に平戸に設置されたが、一六四一年に幕府の命令に従って長崎の出島に移転された。

オランダ人の日本への来航の目的は金銀銅の獲得であった。オランダ人はその対価として日本へ絹（生糸と絹織物）を船載する必要があった。日本向けの絹は台湾を通じて中国から調達されていたが、明清交替期にはベンガルおよびトンキンが最も重要な供給元となった。絹のほかに、オランダ人はインドから木綿製品を船載してい



図序-1 17世紀頃のアジア貿易圏

銀銅に次いで数量的に重要な輸出品は樟脳であった。オランダ人によって輸出された樟脳は特にペルシアやインドで消費された。

このように、オランダ船で日本からバタフィアへ船載された商品は、東インド会社のアジア域内貿易に使われていた。東インド会社は、最盛期の十七世紀においては、アラブのモカから、ペルシア、インド、セイロン、ビルマ、シヤム、カンボジア、ラオス、マラッカ、トンキン、インドネシア諸島、台湾、日本に至るまでのアジア各地に商館を有していた。これらの商館は互いに商品を売買して、商館間の取引の際に作成されていた注文書が現存している。その記録を調べると、そうした取引には、純粋な貿易用の商品として注文されるものもあれば、現地の君主や高官、商人のための贈物としての注文も多く含まれていたことが分かる。このようなアジア各地で交換された贈物の中には日本製品も含まれていた。また、日本においても商館は將軍や幕府高官、長崎地役人などに対する贈物の献上を盛んに行っていた。

こうした貿易業務を管理していたのは、バタフィア

た(本書第六―七章参照)。また、砂糖も重要な輸入品であった(本書第八章参照)。このほか、シヤムからの漆や蘇木、シヤムやコロマンデルからの刀の柄用の鮫皮、台湾やシヤムからの武器や馬具用の鹿皮、シヤムやカンボジアからの牛皮、さらにアジア各地からの鉱物(鉛、鉄、水銀、錫)、葉種、胡椒、香料や香木などもオランダ側の貿易品に含まれていた。これらの商品に比べると量的には少なかったが、べっ甲、珊瑚、象牙なども舶載されて、江戸文化の形成に大きな影響を及ぼした(本書第五章参照)。このように日蘭貿易とはいうものの、江戸時代にオランダ人によって日本に輸入された物の多くはアジアの産物であった。

なお、オランダ本国およびヨーロッパからの日本への輸入品については、毛織物が中心であったが、時計、ガラス、眼鏡、地球儀、顕微鏡、書籍、薬品なども需要があり、こうした科学技術に関連する商品の輸入が西洋の様々な技術の受容につながったといえる(本書第一―三章参照)。東インド会社が倒産した一七九五年以降には、オランダ領東インド産の砂糖、オランダ本国産の毛織物やヨーロッパ産の更紗が主な輸入品であった。また幕末になると、艦船や武器も重要な輸入品となっていた(本書第三章参照)。

一方、オランダ人が日本からバタフィアへ持ち帰った物として、金銀銅および樟脳のほかに、陶磁器や漆器が挙げられるが、日本への輸入品の品目が多岐にわたっていたのに比べると、日本からの輸出品については多様性が乏しかった。しかしながら、和紙、小袖、酒、醤油、香物、漬物といった日本文化を象徴する商品が、僅かの数量とはいえ、バタフィアを経由してアジアにおいて、さらにはオランダにまで普及することになったことは興味深い(本書第四章参照)。ただし、日本からのほとんどの輸出品はアジア各地にあった東インド会社の商館のネットワークを通じてアジア域内貿易で販売されていた。東インド会社は日本産の銀を中国やアジア各地へ輸出していたが、一六六八年の幕府による銀の輸出禁止令発布以降は、金を主にインドのコロマンデル地域へ、銅をインドや東南アジアへそれぞれ輸出した。しかし、十七世紀後半以降、金銀銅の海外流出を防ぐための幕府による貿易制限令が厳しくなるにつれて、日蘭貿易の規模は十八世紀末にかけて徐々に小さくなっていった。なお、金

にある東インド会社のアジア本部であった。この本部は一六一九年に設置され、その統治を行っていたのがバタヴィア政庁であった。東インド会社のアジア各地の商館はすべてこのバタヴィア政庁の統治下に置かれていた。バタヴィア政庁は総督および評議会から構成されていた。総督は十七人会と呼ばれる、オランダにある東インド会社の重役会によって任命されていた。なお、東インド会社のオランダにおける本部機能というべきものは一カ所に集約された形態ではなく、アムステルダム、ゼーランド、デルフト、ロッテルダム、ホールン、エンクハイゼンという六つの支部から構成されていた。これらの各支部の代表を務めていたのが十七人会であり、東インド会社の総合的運営を任されていた。総督はアジアにおける貿易業務について一般政務報告書をこの十七人会へ定期的に送付していた。それに対して、十七人会は総督への指示書を送付していた。一般政務報告書には、アジア市場向けのヨーロッパの商品の注文リストも所収されており、また逆に、十七人会からの指示書には、ヨーロッパ市場向けのアジアの商品の注文の情報なども含まれていたため、これらの文書はアジアとヨーロッパとの間の貿易についての研究史料として有用である。

当時、オランダ・日本間直行の海運はなかったが、日本の陶磁器や漆器などの一部はオランダへも送られていた。オランダからバタヴィアへの航海期間は通常七ヶ月から九ヶ月かかっていた。一方、バタヴィアからオランダへの航海は南東の季節風および有利な海流を利用することができたため、帰還船は七ヶ月ほどでオランダに到着していた。オランダからバタヴィアへ向かう船を年に複数回送ることは珍しくなかったが、一六三六年以降においては、毎年九月から十月の間に数隻の船を出帆させることが慣例となっていた。これは商品や手紙をバタヴィア経由でアジアの各商館に効率よく転送するためであった。バタヴィアからオランダに向かう帰還船隊は例年十二月から一月の間に出帆し、夏頃にオランダに到着していた。また、日本から出帆したオランダ船はたいがい帰還船隊の出発までにバタヴィアに到着していたので、オランダ向けの日本の商品をこの帰還船隊でオランダへ送ることが可能であった。このようなオランダ・バタヴィア間およびバタヴィア・日本間の海運事情を勘案す

ると、オランダから日本の商品を注文しても、その注成品がオランダへ到着するには少なくとも二年間という長い年月が必要であったことが分かる。

ところで、オランダとアジアを結ぶ東インド会社の組織力を支えたのは、綿密に付けられていた事務書類である。その事務書類の多くは現存し、オランダのハーグにある国立文書館に保管されている。その文書群の中には、本書が扱っている日蘭貿易史研究において有用かつ貴重な史料が多く含まれている。というのも、この研究分野において参照しうる日本側史料は断片的にしか残っていない。それに対して、東インド会社文書(VOC)および日本商館文書(NFJ)は、日蘭貿易に関する情報の宝庫といえる。東インド会社文書には、十七人会および各支部の文書の一部が収められており、たとえば前述した十七人会と総督との間の文通が含まれている。また、東インド会社文書とは別に日本商館文書が存在している。日本商館は、アジアにおけるほかの商館と状況が異なり、一七九九年におけるオランダ東インド会社の倒産以降も存続した唯一の商館であり、倒産後も文書作成が継続された上に、長期間にわたって文書を出島で引き続き保管していた。幸運にも、これらの文書はほぼすべて現存しているので、日蘭貿易史という研究分野において、対象としうるテーマと年代をより包括的な範囲に広げることができる。なかでも、貿易品の数量と価格について最も詳細な情報を与えてくれるのは、日々の取引を記録した仕訳帳と、船の積荷を書き記した船積送状である。また、東インド会社の各地の商館からの注文やそれらの注文に対する日本商館の対応について知るには、関連する各商館の間でやりとりされた書簡を調べることが有用である。さらに、このような注文に関する日本側の対応やその実態についてのより詳細な情報を与えてくれるのは日本商館長日記である。これらの史料を駆使することで、各商館と日本商館との間の売買における具体的な商品や数量および実情が浮かび上がってくる。このほかに、商館長が作成した貿易報告書や、将軍や幕府高官への献上品および彼らからの注文品のリスト、バタヴィア政庁およびほかの商館からの注文書、損益勘定など、貿易に関するあらゆる会計帳簿や貿易書類が日本商館文書として現存している。

ただし、これらの文書はあくまでも東インド会社が行った公式の貿易業務の記録であるため、長崎で一定の額まで許されていた私貿易については、残念ながらほとんど情報を与えてくれない。とはいえ、江戸時代に日本とオランダ東インド会社が行っていた公式貿易について、これらの文書から得られる情報は膨大な量に及び、先学によってすでに研究対象として取り上げられ、日蘭貿易に関する概要がかなり解明されてきた。しかしながら、日本商館文書および東インド会社文書にはまだ発掘されていない情報が豊富に眠っている。そのため、さらに深く踏み込んだ具体的な研究を行う余地があり、それを示すことが本書の主要な目的の一つである。そして、本書のもう一つの目的は、これらの史料の分析をもとに、日蘭貿易において舶載された物をアジアの国際状況の中に位置づけることである。

さて、本書で最初に提示するテーマは技術の情報伝達である。日蘭関係史におけるオランダ側の最も重要な課題は、紛れもなく金銀銅の獲得であった。これはバタヴィア総督の文通や商館長日記および報告書の内容から明らかである。それに対して、日本側が最も関心を寄せたのは貿易そのものではなく、世界の動向についての情報収集および医学などの知識と技術の習得であった。これは日本側とオランダ側双方の史料から読み取ることができ、この状況を踏まえた上で、本書ではまず幕府高官をはじめとする日本人による西洋の知識と技術の習得に目を向ける。

まず、第一章「オランダ商館長日記にみる西洋医学伝授」では、江戸初期のかなり早い段階から幕府高官が西洋の医学に関心を持っていて、その医学を日本へ導入するために積極的に動いていたということを論じている。十七世紀のオランダ商館外科医による医療行為や医学伝達については、すでにヴォルフガング・ミシエル氏が精力的に研究を行い、その事実解明に貢献してきたが、同章では、当事者個々人の行いに焦点を当て、ミクロ的な視点で医学伝達というテーマを紐解いていく。ここでもオランダ商館長日記および書簡が具体的かつ豊富な情報を提供してくれるが、これらの情報の中にはこれまでの研究において十分に活用されてこなかったものも少なくない。このような豊富な情報の宝庫への扉を開くことも同章の目的の一つである。

そして、この医学伝達に深く関わっているのが植物学であるが、このテーマは第二章「江戸期日本における科学知識伝達の視覚化としての植物図」においてウラン・レメリンク氏が扱っている。江戸時代における植物学については、これまで日本側史料および日本に舶載された西洋の植物学書を中心とした研究が盛んに行われてきた。最近では、この分野の研究成果の進歩を物語るものとして、江戸期屈指の本草家小野蘭山について小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会によって出版された大著『小野蘭山』(二〇一〇年刊)がある。一方、今回、ウラン・レメリンク氏は知識媒体としての植物図に注目して、その図の描写方法の分析を通して、西洋の科学認識の受容過程を解明するとともに、日本人が科学的描写法を習得したことによって、逆に日本の植物に関する科学的知識が西洋に伝達されたことをも示している。

十八世紀後半になると、西洋の諸技術の習得には国防という側面もその背景要因として加わってくる。その流れを受けるものとして造船技術が挙げられる。江戸初期に家康がすでに西洋の造船技術に大きな関心を寄せて、オランダ船で白杵湾に漂着したイギリス人の舵取りウィリアム・アダムスに船を造らせている。しかし、日本人の海外渡航禁止令に伴って、大きな船の造船も禁止されるようになった。第三章「蒸気船の発達と日蘭関係」において西澤美穂子氏は、江戸後期における日本人の帆船および蒸気船の造船に対する関心について、情報の伝達、技術、地政学、各藩の動きなどの様々な観点から分析し、西洋式造船が単なる興味の対象あるいは商業用のものから軍事的必要性のあるものとして認知されていく過程を、日本側史料およびオランダ商館長日記の両方を有効に利用しながら解明していく。

本書第二部のテーマはオランダ人によって輸出入された物である。日蘭貿易における主要な輸出品に関してはすでに詳細な研究が行われてきた。最近では、金銀銅および樟脳について鈴木康子氏、銅および米について八百

啓介氏、日本銅のアジア域内貿易について島田竜登氏による研究がある。また、漆器や陶磁器についてはシンティア・フィアレ氏および桜庭美咲氏によってそれぞれ研究が進められてきた。しかしながら、日本特有の製品、とりわけ和紙や小袖、酒、醤油、香の物、漬け物などが、十七—十八世紀においてバタフィア経由でオランダやヨーロッパの上流階級の間で流行していたということはあまり知られていない。第四章「江戸時代にアジアとヨーロッパへ輸出された日本製品」では、シンティア・フィアレ氏がオランダ側史料を掘り起こして、当時流行した日本製品についての具体的な事例をいくつか提示した上で、東インド会社文書の仕訳帳や送り状、決議録、日記、書簡などの史料における膨大な量の情報を縦横に駆使して、それらの製品がどのように日本からバタフィアやオランダへ渡ったのかを辿っていく。

また、日本に輸入された物については、これまで八百啓介氏が砂糖の研究を、石田千尋氏がオランダ船の積荷全般および織物の研究を精力的に進めてきており、その実態が明らかになってきているが、本書ではこれらの商品を広くアジアの経済活動の中に位置づけ、日本国内での販売を含め、より多角的な視点から説明していく。

まず、第五章「江戸期日本の消費生活形成における日蘭貿易の重要性」において、マーサ・チャイクリン氏は江戸期日本に輸入された様々な商品を研究対象としている。チャイクリン氏は多くの興味深い事例を取り上げて、日本人が創り出した独特の文化や商品が実はオランダ人によってアジア各地から舶載された輸入品や原料に大きく頼っていたこと、また、それらの輸入品が日本人の実生活いかに溶け込んでいたかを実証的に説明している。その説明にあたって、チャイクリン氏は日本側史料およびオランダ側史料双方を活用することによって、フィアレ氏による第四章と同様に、多くの新情報を提供している。

続く第六章「インドの村から長崎へ—綿布から見る近世日本と世界のつながり—」において、和田郁子氏は日本に舶載された綿布の原産地インドに目を向けて、これらの綿布がどのように生産され、日本からの注文が東インド会社の職員によってどのように調達されたかについて、その経路を具体的に辿っていく。日蘭貿易史の研究

には、主に日本商館文書が利用されてきたが、和田氏はより広い視野に立って、東インド会社総督の一般政務報告書や当時のオランダ側のインド関連史料を取り上げている。これらの史料から、江戸期日本とアジアとの貿易の実態がより鮮明に浮き彫りになってくる。

こうした綿布を含む染織の輸入をテーマとして取り上げているのが、石田千尋氏による第七章「日蘭貿易における染織輸入」である。染織は生活の基本である衣食住の中の「衣」に関わるものであるだけに、当時の日本人の生活に密接した商品であるといえる。石田氏はオランダ側史料の「送り状」や日本側史料「積荷目録」の分析をもとに、様々な国や地域から毛織物、絹織物、綿織物が東インド会社によって日本に舶載されたことを丹念かつ詳細に記述し、各商品の名称を分析することによって、輸入された染織の多様性を示している。また、江戸後期における染織輸入の数量変動と地政学的要素との相関関係を明らかにし、日本への染織輸入の需給状況を当時の国際情勢の中に位置づけている。

最後に、八百啓介氏は第八章「出島オランダ商館の輸入砂糖」において砂糖を題材として取り上げて、世界史におけるその役割についての研究を概観した上で、仕訳帳の分析をもとにオランダ東インド会社による砂糖の輸入と国内における流通の実態との関連を考察することによって、江戸期日本における砂糖の輸入・販売・流通の全体像を提示している。さらに、砂糖を単なる商品としてだけでなく、権力との関係において分析するという新しい視点も加えている。

以上のように、本書は、日本側史料はもとより、それらの日本側史料を補充しうる情報を豊富に蔵する東インド会社文書と日本商館文書をはじめとするオランダ側史料とも向き合っており、オランダ船に舶載された情報と物の流れや受容の個別的・具体的なあり方を説明しようとするものである。このように史料自体に語らせることによって、歴史が現代の我々にとって身近に感じられるものとなり、また、世界各地からもたらされた技術と商品



カバー図版
(表) オランダ船からの砂糖の荷下ろし 長崎阿蘭陀船出島絵巻 三浦理實図
立正大学情報メディアセンター田中啓爾文庫
(裏) 網の針巻に立ち会ふ通詞とオランダ人 長崎阿蘭陀船出島絵巻 最富綱図
立正大学情報メディアセンター田中啓爾文庫

序

によって形作られていった江戸期日本の社会・文化の実像が、そこから浮かび上がってくるものと思われる。

第1部 伝来する情報

- (32) 一七〇六年—一七〇七年の仕訳帳 (Zrj 387)。
 (33) 「安永二己年横文字願書并和解」(長崎市立シーボルト記念館所蔵中山文庫)。
 (34) 「西日本新聞」平成一六年(二〇〇四)一月二八日記事。
 (35) 一七二四年—一七二五年の仕訳帳 (Zrj 384)。
 (36) 一七二二年—一七二三年の仕訳帳 (Zrj 386)。
 (37) 古賀十二郎「丸山遊女と唐紅毛人」長崎文献社、一九六八年。
 (38) 「長崎文献叢書第一集 続長崎実録大成」長崎文献社、一九七四年、三七九頁。
 (39) 森永種夫編「犯科帳(四)」犯科帳刊行会、一九五八年、四六一—五〇頁。

あ と が き

『日蘭関係史をよみとく』上下巻は、本書下巻の編者が代表する国際日本文化研究センター(日文研)の公式プロジェクト「外書の研究」と東京大学史料編纂所准教授の松方冬子氏の科学研究費補助金基盤研究(B)(一般)「日蘭関係史の再構築—オランダ語・現地語史料の併用による近世アジア海域史の視点から」(二〇一〇年度—二〇一三年度)(2330126)という二つのプロジェクトの協力体制によって成立したものである。

「外書の研究」とは、「外書」と称される、日文研が積極的に収集している日本関係欧文図書や文書の研究の活性化を目的としたプロジェクトである。このプロジェクトの一環として、ここ十年の間、シンポジウムの開催やデータベースの構築、研究成果の出版を行ってきた。

一方、松方氏の科学研究費研究には研究分担者として島田竜登氏と八百啓介氏、連携研究者として上野晶子氏が参加し、編者も途中から連携研究者として加わった。このプロジェクトの成果としてオランダ語史料の可能性をテーマに、若い世代の研究者の結集を目指して、一次史料に基づく研究を論文集としてまとめることを構想した。

両プロジェクトを結びつけたのはオランダのライデン大学教授のレオナルド・ブリュッセイ氏であった。同氏より、本書の方向付けを行うために、日蘭関係史の各分野の内外の専門家を集め、出版構想発表会の開催が提案された。この発表会は二〇一二年五月十九—二十日にコープイン京都において、松方科研により実現され、熱心な議論の末、本書の方針として日蘭関係史料における具体像を一般読者向けに示すことが掲げられた。

それを踏まえ、二〇一二年十二月八日—九日に日文研において、『日蘭関係史をよみとく—蘭学を中心に—』シンポジウムが、さらに二〇一三年四月二十一—二十一日、東京大学史料編纂所において、松方科研による『日

蘭関係史をよみとく」シンポジウムが開催された。両シンポジウムにおいて、執筆者以外に、博覧強記の諸先輩方をコメントーターとして迎え、上下巻について、実際の執筆を意識した発表と討議が行われた。

論文執筆の締め切りは当初二〇一三年七月末と設定していたのであるが、紆余曲折を経て、二〇一四年の冬になってようやく、上巻「つなぐ人々」(松方冬子編)および本書下巻「運ばれる情報と物」という形のあるものに仕上がった。

本書の成るにあたって、多くの方々からの厚いご協力・ご支援を頂いた。二〇一二年の日文研でのシンポジウムの際に懇篤なご指導を賜った稲賀繁美氏、井上章一氏、榎本涉氏、笠谷和比古氏、白幡洋三郎氏、鈴木貞美氏、パトリシア・フィスター氏、レオナルド・ブリュッセイ氏、松田清氏、また二〇一三年の東京大学史料編纂所におけるシンポジウムの際に懇篤なご指導を賜った荒野泰典氏、太田淳氏、小山幸伸氏、櫻庭美咲氏、鳥井裕美子氏、安高啓明氏、レオナルド・ブリュッセイ氏、横山伊徳氏の学恩に深い感謝と尊敬を表したい。

なお、出版構想発表会および二〇一三年の東京大学史料編纂所におけるシンポジウムで発表された島田竜登氏から有意義なご指摘・ご指導を賜った。益満まを氏、西澤美穂子氏にはシンポジウムの運営にご協力を頂いた。上巻の編者である松方冬子氏から下巻の編集および各原稿の査読に関して絶大なるご尽力を賜った。光平有希氏は原稿の校正を行った。クレインス桂子氏は上下巻の四つの英語原稿の翻訳および校閲を行い、本書の成立に全面的に協力した。なお、本巻のレメリンク氏、フィアレ氏、チャイクリン氏の三つの論文の翻訳料は松方科研により支給されたが、上巻のカリオティ氏の論文については、翻訳者の好意により無報酬で行われた。また、オランダ商館長日記の解説についてシンティア・フィアレ氏に懇篤な指導を受けた。平和中島財団の外国人研究者等招致助成によって解説作業のためのフィアレ氏の来日が実現した。フィアレ氏は本書の構成や序についても多くの有意義な指摘を与えてくれた。改めて衷心より厚く感謝申し上げる。

本書の刊行に当たって、写真・図版その他のご提供を頂いた、アムステルダム国立美術館、アムステルダム大

学図書館、アメリカ議会図書館、有田町教育委員会、今右衛門古陶磁美術館、九州国立博物館、杏雨書屋、京都大学附属図書館、宮内庁三の丸尚蔵館、倉敷中央病院、国際日本文化研究センター、国立公文書館、国立国会図書館、佐賀県立九州陶磁文化館、東京国立博物館、東京大学史料編纂所、ハーグ国立文書館、平戸市教育委員会、ライデン大学図書館、立正大学図書館、早稲田大学図書館のご厚誼に対して深甚の謝意を表したい。

最後に、本書の出版を快く引き受けられた臨川書店の片岡敦社長、そして多大なご苦勞をおかけした編集担当の西之原一貴氏に対してはお礼の申し上げようもない。

二〇一五年一月三十日

フレデリック・クレインス

[編者] フレデリック・クレインス (Frederik Cryns)

アントウェルペン (ベルギー) 生まれ。国際日本文化研究センター准教授。
主要業績：『江戸時代における機械論的身体観の受容』(臨川書店、2006年)、
『杏雨書屋洋書目録』(共著、財団法人武田科学振興財団、2006年)、『十七世紀の
オランダ人が見た日本』(臨川書店、2010年)

日蘭関係史を読みとく
下巻 運ばれる情報と物
二〇一五年六月三十日 初版発行
編者 フレデリック・クレインス
発行者 片岡敦
製本刷 亜細亜印刷株式会社
発行所 臨川書店
606-8204 京都市左京区田中下柳町八番地
電話 075-881-1111
郵便振替 00110-1101001
落丁本・乱丁本はお取替えいたしません
定価はカバーに表示しております

ISBN 978-4-653-04312-6 C0021 ©フレデリック・クレインス 2015

JCOPY (社) 出版者著作権管理機構 委託出版物

本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています。複写される場合は、
そのつど事前に、(社)出版者著作権管理機構 (電話 03-3513-6969, FAX 03-3513-6979,
e-mail: info@jcopy.or.jp) の許諾を得てください。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは著作権法違反です。

執筆者紹介 (掲載順)

フレデリック・クレインス → 編者紹介へ

ウラン・レメリク (Wulan Rimmelink)

ジョグジャカルタ (インドネシア) 生まれ。ライデン大学研究員。
主要業績：『The timeless legacy of Siebold in botanical illustrations』, in : *Siebolds bloemen
tuin*. Sieboldhuis exhibition catalogue, Leiden, 2010.

西澤美穂子 (にしざわ・みほこ)

新潟県生まれ。専修大学文学部助教。
主要業績：『和親条約と日蘭関係』(吉川弘文館、2013年)、『メイランから見た商館長
ティツィング』(横山伊徳編『オランダ商館長の見た日本』、吉川弘文館、2005年)

シンティア・フィアレ (Cynthia Vialle)

パラマリボ (スリナム) 生まれ。ライデン大学文学部研究員。
主要業績：『オランダ向け日本磁器：オランダ連合インド会社の記録』(『古伊万里の
道』佐賀県立九州陶磁文化館、2000年)。In *Aid of Trade : Dutch gift-giving in Tokugawa
Japan*. (東京大学史料編纂所研究紀要第16号、2006年)。The *Deshima Dagregisters*. Insti-
tute for the History of European Expansion Leiden, 1780-1790(1996); 1790-1800(1997);
1641-1650(2001); 1650-1660(2005), 1660-1670(2010).

マーサ・チャイクリン (Martha Chaiklin)

マサチューセッツ州ノースハンプトン (アメリカ合衆国) 生まれ。
主要業績：『Ivory and the Aesthetics of Modernity in Meiji Japan. Basingstoke : Palgrave
Macmillan, 2004. C.T. Assendelft de Coningh. *A Pioneer in Yokohama — A Dutchman's
Adventures in the New Treaty Port*. Cambridge, MA : Hackett Publishing, 2012. Translated,
introduced and annotated. *Dutch Commerce and Dutch Commercial Culture. The Influence of
European Material Culture on Japan, 1700-1850*. Leiden : CNWS, 2003.

和田郁子 (わだ・いくこ)

京都大学 白眉センター/人文科学研究所 特定助教。
主要業績：『港町に生きる』(港町の世界史3) 歴史学研究会編 (共著、青木書店、
2006年)、『要塞、市壁、石の商館』—インド・コロマンデル海岸の港町：1606-1707
年—(『史林』、第95巻1号、2012年)。

石田千尋 (いしだ・ちひろ)

岐阜県生まれ。鶴見大学教授。
主要業績：『日蘭貿易の史的研究』(吉川弘文館、2004年)、『日蘭貿易の構造と展開』
(吉川弘文館、2009年)、『幕末開国期における日蘭貿易—安政3年(1856)の本方荷物と
脇荷物の取引—』(『鶴見大学紀要』第51号第4部、2014年)。

八百啓介 (やお・けいすけ)

福岡県生まれ。北九州市立大学文学部教授。
主要業績：『近世オランダ貿易と鎖国』(吉川弘文館、1998年)、『砂糖の通った道：菓
子から見た社会史』(弦書房、2011年)。